

松平郷館と松平太郎左衛門家

松平東照宮の境内にある小さな博物館で、松平家にまつわる文書、武器、甲冑、像などが展示されている。中でも最も古いものは、16世紀に作られた木造の松平親氏（伝1394年没）の像で、僧衣を着て座っている。親氏が松平郷に定住する前に旅の僧であったことにちなんでいる。この像以外の展示品のほとんどは、松平宗家が南や西へと領土を拡大し始めた15世紀に設立された、祖先の地を守る任務を負った松平太郎左衛門家ゆかりの品だ。

太郎左衛門家は松平家の忠実な家臣であり、松平家の当主である徳川家康（1543-1616）が天下を統一する道を開いた1600年の関ヶ原の戦いをはじめ、多くの戦いで宗家とともに戦った。博物館に展示されている甲冑の中には、太郎左衛門家の武士がこれらの戦いで着用したものもある。

徳川幕府が日本を支配していた江戸時代（1603-1867）には、太郎左衛門家は「旗本」という高い地位にあった。松平家の祖先の地や墓を守る見返りとして与えられたこの身分は、太郎左衛門家の当主が将軍に謁見する権利を持ち、事実上の首都であった江戸に定期的に訪れることが求められていた。太郎左衛門家は、1868年の明治維新で幕府が倒されると特権を失ったが、20世紀に入っても松平郷に屋敷を構えていた。